

ファシズム体制下の検閲と女性文学： パオラ・マシーノ『主婦の誕生と死』に ついての考察

柴田 瑞枝

はじめに

レティツィア・パニッツァとシャロン・ウッド編纂の *A History of Women's Writing in Italy* (2000) によれば、ファシズム期には、女性の出版活動がかつてないほど盛んになったという。体制下では、とりわけ1940年代以前、どちらかという「文字どおりの」検閲が行われていたために、ムッソリーニやローマ教皇、カトリシズムといった直接的な政治的テーマへの明確な批判的言及を避ければ、出版許可を受けることは可能だったといい、その好例のひとつとして、パオラ・マシーノ(1908～1989)のいくつかの短篇が挙げられている⁽¹⁾。

マシーノの短篇や長篇小説の主題として目を引くのは、殊の外強い死への執着のほか、どこか歪んだ親子関係、母性の否定など、ファシズム政権が標榜していた家父長制的な家庭像や、「献身的で多産な母親」⁽²⁾といった女性像とは相容れないものばかりである。彼女は、1920年代後半から精力的に執筆活動を行い、多くの短篇を雑誌や新聞に寄稿し、1945年までに3作の長篇も残しているが、次第にファシズム政権との関係において立場を困難なものにし、検閲をめぐるさまざまな動向に翻弄されることになる。しかし、そうした逆境をバ

ネにするようにして、検閲と日常的につきあうなかで、独自の文体を練り上げていったことが窺える。私生活においては、1927年にマッシモ・ボンテンペリと出会い、恋愛関係になるが、相手は30も歳上の既婚者で子どもがあったため、当初はちょっとしたスキャンダルとなった。一般的な女性のモデルから逸脱した、未婚で子どもを持たない知識人であったマシーノは、当時の政権にとっては、いわば「イタリア人女性の悪い例」⁽³⁾であった。

本論考では、ファシズム体制下で文学にかんする検閲がどのように展開していったのかを概観したうえで、マシーノの代表作とされる3作目の長篇小説 *Nascita e morte della massaiia* (『主婦の誕生と死』、1945年)に着目し、ファシズム下における文学の検閲が彼女の作品にどのように作用したのかを検討する。

リアリズムと独特の寓話的な要素が入り混じった『主婦の誕生と死』は、1941年に書き上げられ、著者自身や出版社による「自己検閲」、政権当局の検閲など、複数層の検閲の「障壁」を乗り越え、紆余曲折を経て戦後1945年にボンピアーニから出版されたが、当時はネオレアリズモ隆盛の最中であって、読者から十分に理解されなかった。1970年同社から、また、1985年になってラ・タルタルーガ社から再版された際には、フェミニズムのモチーフを先駆的に描いていたことから、驚きをもって迎えられるも、またもや早々に忘却の彼方に追いやられてしまった向きがある。しかし、1994年に作家の長篇第一作 *Monte Ignoso* (『燃える山』)が63年ぶりに再版され、翌年には、未刊の作品を含む短編集 *Colloquio di notte* (『真夜中の会話』)が出版されたことに加え、「パオラ・マシーノ・アーカイブ Archivio Paola Masino」が1997年にローマ・サピエンツァ大学の「20世紀アーカイブ Archivio del Novecento」に組み込まれたことを受け、イタリア本国や欧米諸国で、マシーノの作品の再評価の動きが高まっている。初版の登場から三四半世紀を経た今、新たな読者を惹きつけているこの作品の魅力について、ファシズム下の検閲の問題と併せて、改めて

考えてみたい。

1. ファシズム体制下の検閲

1.1 概要

まず、ファシズム政権下で文学の検閲がどのように展開していったかを概観する。グイド・ボンセーヴァーは、その著書 *Censorship and Literature in Fascist Italy* のなかで、ファシズム期の検閲段階を3つに分け、それぞれの特徴をおおまかに以下のように定義している。すなわち、1) 1922～33年：検閲システムの準備期、2) 1934～39年：大衆文化省（Ministero della Cultura Popolare、通称 ミンクルポップ MinCulPop）による検閲システムの完成、3) 1940～43年：参戦と新たな検閲方針（ドイツとの同盟関係の影響の強化）である。

1922年10月首相となって政権の座についたムッソリーニは、まず国民の民意を味方につけ、内務省 Ministero dell'Interno を中心にして、民衆を「ファシスト化」することを急いだ。内務省の内部には広報部 Ufficio stampa が存在したが、その仕事の要は、程なく、雑誌などの消極的な検閲から、世論をつくりあげていくための活動へと変化していった。同広報部は、1923年8月にはすでにムッソリーニ直轄の部署となっており、'25年までに「首相広報部 Ufficio stampa del Capo del Governo」と改名されている。その前年の'24年に統一社会党議員マッテオッティがファシストらに誘拐・暗殺される事件が起ると、体制には反対するメディアを封じる必要が生じ、同年7月、ムッソリーニは各県の知事 Prefetto が定期刊行物をただちに禁止できるよう、急いで法を整備した⁽⁴⁾。

1932年には、内務省から県知事らに向け、「すべての出版社は、書籍が流通する前に著者名とタイトルを知事に提出する」よう指導せよ、との指示が出された。これは、イタリア全土で、誰がどのような書籍を出版しているかを把握しようとする初めての目論見であったと見られる⁽⁵⁾。

続く '34 年以降、ムッソリーニの広報部は次第にその存在感を増し、幾度かの部署の編成・改名を経て、最終的に 1936 年 6 月、「大衆文化省 Ministero della Cultura Popolare」という独立した省になる⁽⁶⁾。それに先立って、1935 年 10 月、イタリアはエチオピア侵攻を開始し、国際社会で孤立していた。経済的に自立した国家である必要が叫ばれ、イタリア文化の振興や出版を支援しようと、国が影響力を強めた。とりわけ、モンダドーリやボンピアーニなどの大手出版社の例に見られるように、国と出版業界の関係は、しばしば持ちつ持たれつものになっていった⁽⁷⁾。1937 年にはすべての出版社に毎月の出版物のリストを大衆文化省に提出することが求められ、さらに翌年には、すべての海外の書籍の出版には大衆文化省の審査が義務付けられるなど、この省を中心とした検閲の中央集権化が進められていく⁽⁸⁾。

30 年代後半における出版にかんする事件として、1938 年にイタリアの学校でのユダヤ人著者による教科書が法的に禁止されたこと、また、当時の大衆文化省大臣ディーノ・アルフィエーリ主導による「書籍の浄化 Bonifica libraria」が始まったことは、特筆すべきであろう。ファシズム政権に忠実な「専門家」たちが集まり、第一次世界大戦後に出版された書籍のうち、体制にとって問題をはらむものについて話し合った⁽⁹⁾。その結果、1939 年 2～3 月に「書籍浄化委員会」によって「イタリアで歓迎されない著者のリスト Elenco di autori non graditi in Italia」が作成され、122 のタイトルが挙げられた。これに最も熱心だったのは、当時の教育省大臣ジュゼッペ・ボッタイであった。ボッタイは一般に「穏健な」ファシストとして知られるが、自身が主宰するファシスト党の理論誌《Critica fascista》上で、ユダヤ人女性作家によるイタリアの児童文学への影響を批判し、「イタリアで歓迎されない著者のリスト」にも、これらの女性作家の名が掲載されることになった⁽¹⁰⁾。

イタリアは 1940 年 6 月にフランスとイギリスに宣戦布告し、翌年 12 月にはドイツと共にアメリカ相手にも戦争を開始する。ナチス・ドイツとの同盟関

係が深まるなかで、出版や検閲についてドイツから干渉されたり、「歓迎されない著者のリスト」の共有を迫られたりしたのがこの時期である。1942年5月、「イタリアで歓迎されない著者のリスト」が大衆文化省から全県の知事と出版社に送られたことは重要である。それまで省内の内部文書だったものが、公のものとなったためである。

こうした一連の流れからは、ファシズム政権下の約20年間に、各県の知事を筆頭とする警察機関など、既存のシステムを利用していた検閲が、次第に大衆文化省によって中央集権化され、出版社や著者に対する締め付けが強くなっていった様子が窺える。特に1940年代に入ってから、それまで表面的にはあくまで「自由なイタリア」⁽¹¹⁾を印象づけようとしていた当局は、「イタリアで歓迎されない著者のリスト」を公にするなど、より断固とした、明白な検閲の姿勢を示した。検閲の体系やその厳格さは年々変化していったわけであるが、なかでも、ファシズム政権による検閲の歴史において、1934年に起こったある事件が重要なターニングポイントになったことが、近年研究者らにより指摘されている⁽¹²⁾。

1.2. 1934年のムーラ事件

ムーラ事件とは、1930年代当時、女性読者に人気のあったムーラ（本名マリア・ヴォルピ、1892-1940）の恋愛小説がムッソリーニの逆鱗にふれたことから、検閲が強められることになった一件である。問題となった小説は、元々は、1930年にミラノのファッション誌「Lidel」に掲載された短い物語⁽¹³⁾で、アフリカのある部族出身で、ヨーロッパで高い教養を身につけた黒人男性と、イタリアの未亡人が恋に落ち結婚するまでを描いたものであった。1934年、それに続編をつけたした *Sambadù, amore negro*（『サンバドゥ 黒い恋人』）がイラスト入り月刊誌「Novella」の増刊としてリッツォーリ社より出版されると、その表紙を見たムッソリーニは激怒して、直ちに警察長官から各県の知事に通

達を出させたのである。そのなかで、同作品を押収し、以降、新しく出版されるすべての書籍を内務省に提出するよう命じた。それだけでは収まらずに、翌日自ら通達を出し、それ以後、すべての出版社が全出版物について3冊を県に送付するよう求めた¹⁴⁾。このうち1冊は地方警察署に、もう2冊はローマ（公安部とムッソリーニ直属の広報部）に送られることになった。

『サンバドゥ』が統帥をこれほどまでに怒らせたのには、ひとつにはエチオピア侵攻を計画していたムッソリーニが、人種の問題に敏感になっていたことが考えられる。しかし、実は植民地小説では、異人種間の性的関係を描いたものは珍しくなく、これが「黒人男性とイタリアの未亡人」であったことが問題だったのだという研究者の指摘もある¹⁵⁾。体制の検閲にとっては、「イタリア人という人種」の優越性を示すために、女性のセクシュアリティや感情表現を統制する必要があったというわけである。たしかに、ムーラには女性読者が多かったことから、ムッソリーニが、こうした作品が女性のモラルに与える影響を危惧したというのは、十分考えられることである。

実は、小説版ではニオミンカスと結婚した未亡人の女性は息子を産むが、ニオミンカスは自分のルーツを捨て切れずに、妻と息子を捨ててアフリカへ帰ってしまい、女性は彼との結婚を後悔する。したがって、物語の内容はむしろ体制の方向性と矛盾しないのだが、作品は依然として、「人種の尊厳を損なうもの」¹⁶⁾であるとして禁書処分となった。こうした矛盾をはらむ事態から、ムッソリーニが表紙を見ただけで、小説の詳しい内容までは吟味せずに半ば衝動的な措置が取られ、結果的に検閲が厳格化された可能性もぬぐうことができない。

いずれにせよ、当局の検閲の目が厳しくなったことで、出版社は以後、自己検閲の傾向を強めていく。出版自体が禁じられたわけではなくとも、一度世に出た書籍が差し押さえられれば、膨大な経済的ロスが生じるため、事前に検閲で問題になりそうな出版を控えるようになったのである。後の項目で具体例を挙げて考察するが、マシーノが受けた「検閲」は、政権当局による公的なもの

だけではなかった。それ以前に、モンダドーリやボンピアーニなどの出版社からの、「助言」や「校正の勧め」というかたちをとって行われた実際上の検閲に近い校閲の件数は、決して少なくなかったのである。

2. パオラ・マシーノ『主婦の誕生と死』

2.1. 作家略歴

パオラ・マシーノは1908年ピサに生まれ、ローマで育った。母ルイーザ・スフォルツァは貴族の家系、トスカーナ人の父アルフレードは農業省の官僚で、パオラは姉ヴァレリアとの2人姉妹であった。マシーノの父親はセンチメンタリズムを嫌い、娘たちにはデ・アミーチスの『クオーレ』を読むことを禁じたという。パオラは幼い頃から聖書を精読し、フローベール、ディケンズ、ドストエフスキーなどの19世紀作家にも親しんだ。文学や音楽などの芸術を愛する父の影響を受け、16歳で戯曲*Le tre Marie*（『3人のマリア』）を執筆し、同作に目を通してもらったことをきっかけに、ピランデッロと親交を深める。

1927年、マシーノが19歳のとき、30歳年上のマッシモ・ボンテンペリと出会う。ボンテンペリには妻と息子がおり、歳の差も大きかったことから、マシーノは家族から大反対を受けるが、ふたりはのちに同居し、何より文学という絆によって結ばれた関係は、生涯にわたって続いた。1929年から'31年にかけて、ふたりはローマを離れてパリで暮らし、デ・ピシスやピカソ、デ・キリコ、サヴィーニオ、モラヴィアなど、さまざまな芸術家や知識人たちと交流する。

マシーノはボンテンペリの主宰する雑誌「900」にも短編を寄稿し、1931年には16の短編をまとめた*Decadenza della morte*（『死の退廃』）を出版する。同年、初の長篇小説*Monte Ignoso*（『燃える山』）を出版し、ヴィアレッジョ賞金メダルを受賞して話題を呼んだ。1933年には、2作目の長篇小説となる*Periferia*（『郊外』、1933年）で、またもヴィアレッジョ賞の2位を獲得する⁽¹⁷⁾。

1941年、ボンピアーニ社から *Racconto grosso e altri* (『中篇とその他の短篇』) を出版する。マシーノの代表作となった『主婦の誕生と死』(1945年)は、ファシスト党を追われ流刑となったボンテンペッリとともに過ごしながら、ヴェネツィアで書き上げたものである。1943年7月のムッソリーニの逮捕時、ふたりはローマに戻っていたが、サロ共和国の書記長アレッサンドロ・パヴォリーニにより、マシーノは流刑者のリストに、ボンテンペッリは死刑者のリストに載せられていた。そのため両者は、連合軍による解放までの9ヶ月間を、身を隠して友人たちの家を転々としながら過ごした。戦後はさまざまな雑誌に寄稿し、ジャーナリストとしても活躍した。1946年には、ボンテンペッリ、モラヴィア、ピオヴェーネなどと共に雑誌「Città」を創刊し、1947年には、*Poesie* (『詩集』) を発表した。

1960年にボンテンペッリが闘病の末他界してからは、故人の全集の編纂に尽力した。60年代から70年代にかけては、オペラの台本執筆のほか、バルザックやスタンダールを始めとするフランス語作品の翻訳に取り組んだ。晩年は急激な変化を遂げるイタリア社会に居心地の悪さを感じ、自らのプライベートな思いを綴る *Appunti* (「ノート」) を書くほかは、執筆活動とは距離を置きつつ余生を過ごした。1989年、ローマで永眠する。

2.2. マシーノとファシズム下の検閲

マシーノがどの時点でファシズム政権の検閲のレーダーにかかったか、正確な時期を特定するのは困難だが、長篇『燃える山』(1931)や『郊外』(1933)の校正の段階で、出版社のボンピアーニが著者に、公の検閲前に修正の検討を申し入れた例が確認されている。『燃える山』では、ボンピアーニが死に色濃く特徴づけられた「病的」な結末を全面的に覆すことを勧めているが、このときマシーノは、修正を断固拒否している⁽¹⁸⁾。これは、検閲が嚴重化されるきっかけとなった1934年のムーラ事件以前のことであるが、当時すでに、出版社

によるある種の自己検閲が働いていたことが窺える。さらに、社主のヴァレンティノー・ボンピアーニからマシーノに宛てた1933年3月7日付の手紙には、「『郊外』を読みました。今日、イタリアにこれほどの独創性とポテンシャルをもつ本を書ける人はいないと思います」⁽¹⁹⁾とあり、その作品を称賛しつつも、『燃える山』のときと同じ表現の問題がある、と続けている。そこに列挙された「問題の」表現とは、以下のようなものである。

「僕らぐらいの年の子はみんな、死んだ子どもに似るものだよ」(“alla nostra età si deve somigliare a bambini morti”)

「僕、地獄があってよかったよ、母さんは間違いなくそこへ墮ちるだろうから」(“Io sono contento che ci sia l'inferno perché mamma mia ci va di sicuro”)

「母さんは私を見殺しにする言い訳が見つかって喜ぶでしょう」(“la mia mamma sarebbe felice di trovare una scusa così bella per farmi ammazzare”)

「女はみんな、苦しむのが好きなんだ、だから子どもを産むんだよ。男は戦争したり悪事を働いたりするのが好きなんだ」(“A tutte le donne gli piace di soffrire e per quello fanno i figli. Agli uomini gli piace di fare la guerra e i delitti”.)

「こいつは英雄じゃない [...] どこにでもいる夫だ」(“Non è un eroe [...] È un marito qualunque”)

これらの例からは、「死んだ子ども」といった禍々しいイメージのほかに、母性を否定したり、政権が謳う性的役割⁽²⁰⁾を拒否したりするかのようなくだりに、ボンピアーニが懸念を示していたことが看取される。出版社が検討を要請したこれらの箇所についてマシーノが修正に応じなかったため、1作目の『燃える山』のときには、著者に対しある程度柔軟な態度を見せたボンピアーニも、1933年3月10日付の手紙で、修正を行わないのなら『郊外』の出版をとりやめにするかと仄めかしている。マシーノは、一度は原稿に手を入れることに同意

したが、またしても最終的にその意向を覆したため、ボンピアーニは仕方なく、印刷された書籍の帯に「この美しく、鼻持ちならない本を、わたしはただ契約上の義務によって出版します」⁽²¹⁾と断りをつけることになった。

『郊外』は、しばしば親たちから不当な扱いを受けている子どもたちを主人公にしており、家庭内の不和や虐待の様子が生々しく描かれ、体制の吹聴する「偉大なイタリア」には似つかわしくない、不都合な作品であった。先述の通り、ヴィアレージョ賞の2位を獲得し話題を呼んだものの、案の定、体制に近い評論家たちからは辛辣な批評が寄せられた。ガエターノ・セルヴェンティは、「Il Secolo Fascista」上で、「まるでユダヤ人によって書かれた本のように」と揶揄したうえで、マシーノを「へぼ作家 scribacchina」と呼んだ。さらに、彼女の作品を読まないよう読者に勧告したうえ、ボンピアーニ社を始めとするイタリアの出版社の多くが「女性作家の作品を多く出版しすぎる」として批判した⁽²²⁾。また、「Provincia di Vercelli」上で、レアンドロ・ジェッローナがマシーノをネガティブな作家だと批判し、イタリアの偉大さを無視していると非難すると、ムッソリーニがそれを評価して、自ら評論家の意見にお墨付きを与え、ヴェルチェッリの知事に電報を送る⁽²³⁾ということが起きた。評論家による酷評あるいは黙殺という点では、たとえばモラヴィアの *Le ambizioni sbagliate* (『潰えた野心』、1935年) にかんしても同様のいきさつがあった。『無関心な人びと』に続く2つ目の長篇小説となるこの作品は、検閲後、とにもかくにも出版に漕ぎ着けたものの、当局から各新聞に、この本について触れてはならないと通達があったそうである⁽²⁴⁾。出版自体を公に禁じるのではなく、批評などの言論を封じて作品を黙殺し、大衆の注意を逸らすというのも、ファシズム政権下におけるひとつの常習的な「検閲」の方法であったと言えるであろう。なお、体制寄りの新聞や雑誌に限らずとも、マシーノが「女性」であることを理由に不当に差別・評価したり、彼女の近代的な文体を非難したりする評論が掲載されることはあった⁽²⁵⁾。なかでも、カルロ・エミリオ・ガッダが雑誌

「Solaria」上でマシーノを「質の悪い未来派」などと酷評⁽²⁶⁾したことはよく知られている。

1938年、マシーノの短編 *Fame* 「飢餓」がチェーザレ・ザヴァッティーニの雑誌「Le grandi firme」に掲載されると、ムッソリーニはこの雑誌の廃刊を命じた。同短編は、飢えた一家の父親が、飢餓の苦しみから救うためにふたりの子どもを手にかけるという、極めて残酷で、当時の社会情勢と無関係とは言い難い⁽²⁷⁾ 繊細な物語ではあったが、実はこれが初出ではなく、1933年にすでにジェノヴァの雑誌「Espero」に発表されていた。同じく'33年にイギリスの「Blast」誌にその翻訳も掲載されており⁽²⁸⁾、その時点では問題にならなかった作品が、'38年には検閲の咎めを受けたのであった。

ザヴァッティーニは当時のことを振り返り、回想録に次のように書いている。

私の「Le grandi firme」はものすごいヒットだった。はつらつとして扇情的な「グランディ・フィルム嬢」が誕生した。最近、彼女のための本までできたくらいだ。彼女に捧げられた歌だって生まれた。

「Le grandi firme」は、内容としては行き当たりばったりだった。そのことで、私を墮落した奴だと言う奴もいるかもしれないが、私はそうは思わない。本当の話、ただある種の偏見のなさがあっただけで、墮落なんてものでなかった。いずれにしても、当時の風潮じゃそれほど大胆なことはできなかった。人から妬まれて、何度か警告された後で、差し押さえがあり、そして廃止になった。命令を下したのはムッソリーニ本人だった。その口実は、「残酷」だと非難された、パオラ・マシーノの多少激しい短編だった⁽²⁹⁾。

ザヴァッティーニの「口実 pretesto」という表現からは、「Le grandi firme」が廃刊になったのは、公的には「マシーノの短編が残酷であるから」だが、実

実際は「墮落的な」内容が、時代の——体制が求めるところの——風潮に合わなかったからからだ、と読み取ることもできそうである。ザヴァッティーニは、「ちょうどこのとき、ムッソリーニはヒトラーに会いに行くところだった […] 雑誌を廃止させたのは、あの環境だった」⁽³⁰⁾とも述べている。「Le grandi firme」の人気は、ザヴァッティーニ本人も触れているように、当時、イラストレーター のジジ・ボッカシーレの手によって描かれた、肉感的な「グランディ・フィルム嬢」によるところも大きかった。巷で人気を博す雑誌のイラストや内容が、風紀上問題視されていたということであれば、マシーノの短編「飢餓」は、ザヴァッティーニが述べているように、「Le grandi firme」を廃刊に追い込むために体制に利用されたという見方もできるかもしれない⁽³¹⁾。

いずれにせよ、こうした一悶着があったので、'41年にマシーノがこの短編を『中篇とその他の短編集』に組み込もうとした際、ボンピアーニはまたも検閲を懸念し、それに反対した。マシーノは作品に修正を加え、ボンピアーニを説得しようと試みるが、結局、「飢餓」は含まれないままで短編集は刊行された。

2.3. 『主婦の誕生と死』

「子どものころ、主婦は、ほこりまみれで緩慢だった」⁽³²⁾という一文から、『主婦の誕生と死』は始まる。全編をとおして名前が明かされることのない主人公の「主婦 la massaia」は、あるときまで、ほとんど自宅のトランク il baule の中で日々を過ごしている。いつも土にまみれ、頭はしらみだらけで、古くなってカビの生えたパンを食べながら、「たんす、寝台、食器だな、テーブル、部屋のかわりになるトランクに横たわり、毎日のように、死にかんする思想を集めて」⁽³³⁾いる。

母親は主人公とは対照的に、ごく「普通」の女性である。妻として、母として、特段疑問を抱かずに、社会から求められる役割を果たしている。当時の一般的な慣習にしたがって、年頃になった娘に夫を見つけようと奔走し、舞踏会

を開く。娘は母を満足させるため、数日かけて小綺麗にして舞踏会に出席し、ほこりにまみれた自由な少女時代に別れを告げ、年寄りの叔父と結婚する。これが「主婦の誕生」である。しかし、主人公には、家を統率して、住居を清潔に保ち、夕食に何を食べるかを決めて使用人たちに命令を下し、彼らがしっかり仕事をこなしているか、盗みを働いていないか目を配る、といった「女主人」としての役目が苦痛でならない。

こうして「主婦」は、それが大きかろうと小さかろうと、家というのは婚姻のその日から彼女をとらえて離さない挽き臼なのだ気がついた。挽き臼を回すことに喜びを覚える花嫁もいれば、誰かに助けてもらう女もいるし、そこに自分の果たすべき義務を見出す人もいるけれど、それにしても世界が創造されてからこの方、誰もが、ごく自然に挽き臼を回してきた。どうしてそれが、ただ彼女にとってだけ、押しつけられた苦痛と感じられるのだろうか？⁽³⁴⁾

物語は9章とエピローグからなり、1章から3章では子ども時代から結婚して「主婦が誕生」するまで、4章から8章にかけては、主人公の性質に全くそぐわない結婚生活への絶望が、軽妙な皮肉と「真っ黒なブラックユーモア」⁽³⁵⁾を込めて描かれる。なかでも、結婚して1年ほど経った頃に自宅で開く夕食会の様子は、戯曲風に書かれており、ト書きを含んでいたり、コーラス隊までもが登場したりと、グロテスクで喜劇的な雰囲気醸し出している。そうかと思えば、「主婦」の一人称で書かれた日記（「雑記帳」といってもいいであろう）⁽³⁶⁾のなかでは、自らの深層心理に対する鋭い考察が、主婦自身の「良識」との対話というかたちで行われている。「主婦」の日々は、崇高な思想や観念と、日常の単調さや、うわべだけを取り繕った社会の空虚さがぶつかり合い、混乱に満ち満ちている。

[…] 主婦はときに、明日はチェスの試合に 10 人もお客が来るのだわ、とか、庭園での目隠し鬼の遊戯には 30 人の著名人が集まるのね、とか、孤児院の子どもたちにコーヒー牛乳をごちそうしなくては、と取り憑かれたように考えた。そんなとき、たとえばだが、彼女の兄弟のひとりが先日の戦闘で負傷したと知らせる手紙が届いたとしよう。すると彼女は善意からすぐに泣き出し、うめくように言った。「可哀想な兄さん、わたしの大事な、大事な兄さん」。しかし、突如、ぱちんこの石が飛んでくるときみたいにまっすぐに、こんな疑いが彼女の額の真ん中を打った。「コーヒー牛乳をごちそうする会というけど、子どもたちはココアの方がいいんじゃないかしら?」。それから、「恥を知りなさい」と自分自身を怒鳴りつける。「嘆きなさい、なんて折の悪い、叫びなさい、ばかも。あなたの兄が血を流しているんじゃないの。「でも、」と彼女のなかの悪魔がせき立てる。「でも、チェスの優勝者には何を贈るの? もちろん、あなたは憔悴した様子で、ぼんやりした目付きで、痛ましい表情をして、ため息ながらに言うでしょう、『哀れな兄が負傷したんですの』と。だけど、目隠し鬼を終えた有名人たちに夕食を用意しておかなきゃならないのよ。あなたの夫を長官に選んでもらうためにはね」³⁷⁾。

このように内心混乱を極めた「主婦」の姿は、ヴェネツィアでのあまりに忙しい家庭生活のために、思うように創作できないことへの不満を爆発させ、「聡明な生活を諦めることにした」³⁸⁾と嘆く作者マシーノと重なるようである。

ファシスト党から距離を置き始めていたボンテンペリが、1937 年 11 月ついに党を追放され、ジャーナリストや作家としての活動も禁じられると、マシーノは伴侶と共にヴェネツィアに移り住んだ。カナル・グランデに面する広いパラッツォ・コンタリーニ・デッレ・フィグーレに住居を移し、彼女は新しい環境のもとで家事や社交に身を入れるが、いつしか客の出入りが多い家のこ

とにかかりつきりとなり、思うように創作をする時間を持てなくなったという。この頃、自分は絶対に幸せな主婦にはなれない、すべての主婦たちのルチエロになるだろう⁽³⁹⁾、と姉への手紙で打ち明けている。

先に触れたように、「主婦」は子どもの頃から死への強い執着を見せるが、9章では自分の墓の準備を済ませ、ついに死ぬ用意ができて満足げな様子が描かれる。ところが、エピローグでは、やっと安息を手に入れたかと思いきや、死んだ後も墓の掃除をする「主婦」の幽霊が現れ、笑いと悲哀を誘う。

ヴェネツィアに移り住んだ当時、マシーノにはさまざまな家事への病的なまでのこだわりが芽生えたといい、それを小説にしてはどうか、とボンテンペリに勧められて『主婦の誕生と死』書き始めたという⁽⁴⁰⁾。こうして、この小説は1938年3月から1940年1月に執筆され、1941年10月16日から1942年1月22日にかけて、モンダドーリの週刊誌「Tempo」に15回にわたって掲載された。

連載が開始される前から、マシーノはまたもや編集者による「検閲」に遭遇する。1941年1月27日の家族宛の手紙には、以下のような記述がある。

アルベルト・モンダドーリは『『主婦の誕生と死』に』とても満足しているようだけれど、原稿の前半部分にかなりの「政治的」検閲をして送り返してきました。彼が危険だと考える文をすべて削除することはできそうにありません。作品の重要な部分のほとんどがそこに含まれているのですから（重要なことがちゃんと書いていけば、ですが）。しかも、彼は、母性に反対する、あるいはそう思われる文章を全部削除してほしいというのです。『主婦』全体が、少なくとも聖書以後は、母性は徳ではなく罰であるという現実のうえに成り立っているというのに⁽⁴¹⁾。

1 作目の長篇『燃える山』と2作目の『郊外』のときには、ボンピアアーニカ

らの再三の修正依頼に頑として従わなかったマシーノだったが、この数日後の家族宛の手紙に、「今日、やっとモンダドーリに『主婦』の原稿全体を送りました。政治と道徳上の検閲を解決したうえでね」⁽⁴²⁾と書いていることから、モンダドーリの要請には、不本意ながらも応じたいことがわかる。「検閲」といっても、ここでは政権の指示によるものではなく、出版社が（ときに「芸術的な見地から」という偽の理由をつけて）著者に勧告する、いわば「修正依頼」である。1936年6月以降、当局から印刷出版許可（nulla osta）を得るために、書籍ではなく校正刷を提出することが可能になっていた⁽⁴³⁾。ボンピアーニやモンダドーリがマシーノにしたように、出版社は経済的ロスを防ぐため、事前に著者に「自粛」を促す検閲を行っていたのである。

では、検閲によって、具体的にどのような修正が求められたのであろうか。マシーノが『主婦の誕生と死』に書いたあとがき（1945年）に、そのいくつかの例が挙げられている。

この本は、'38年と'39年にかけて書かれ、校正刷の状態で当時の検閲にかけられ、敗北主義的で冷笑的だと評価されました。出版こそ禁止されませんが、いくつかの挿話のほか、旧約聖書からの引用はすべて削除するよう命じられました。この物語の全体にわたる無礼な調子によってけがされているかに見える、Maresciallo（「准尉」）、Prefetto（「(知事)」）、Patria（「祖国」）、Nazione（「国家」）といったことばも、禁止されなくてはなりません。ほかにも修正が求められました。たとえば、通貨「リラ」ということばを使ってはならず、イタリアで起きている出来事であると推測できるようなことは、何も書かれてはならなかったのです。修正は行われ、「主婦」は「ツェッキノー」で支払いをし、あらゆる Maresciallo（「准尉」）は Comodoro（「提督」）になり、Arconte（「アルコン」）が登場し、国は大西洋の向こうへ移されました⁽⁴⁴⁾。

一般に、maresciallo はイタリアの陸軍・空軍の准尉を指すのに対し、commodoro は、米、英海軍などの准将を指して用いられる用語である。イタリアが舞台であるとわかるような表現が禁止されたため、名前が特定されていない「Repubblica 共和国」、ヴェネツィアで16世紀に鑄造された金貨「ツェッキエーノ」という語彙が用いられたほか、「la cugina di Biella ビエツラの従姉妹」は「la cugina di provincia 田舎の従姉妹」と変更された。

1942年、『主婦の誕生と死』を書籍化してボンピアーニ社から出版することが計画され、秋にボンピアーニが大衆文化省に校正刷を提出する。すでに雑誌に掲載された版であったので、テキストは公になっていたわけだが、このとき、さらに10箇所（反戦的であると判断された箇所が9つと、中絶を許容する内容であると考えられた箇所が1つ）に修正指示があったという。問題の箇所を直せば良からう、という条件つきで、出版許可が下りた。検閲者が大衆文化省内の「出版総局 DGSI (Direzione Generale per la Stampa Italiana)」に宛てた1942年11月23日付の書類には、『主婦の誕生と死』を「超現実的な」作品であると定義し、「ときに幻のような、不条理で空想的な寓話のなかを、思考と概念が漂っている。人は、歪んだレンズを通して読んでいるような印象を受ける」⁽⁴⁵⁾とする記述があることから、政権の検閲はあくまで表層的なものにとどまっており、マシーノの作品が潜在的にもっていた「危険性」を見抜けなかったか、あるいは、軽視したのだろうと推し量られる。そうであるとすれば、マシーノの物語がもつ、独特の空想的な雰囲気は有利に働いたと言えるだろう。あるいは、政権側がマシーノの作品が社会に与える影響を小さく見積もった結果である、ということも考えられる。あまり時を隔てずして、モラヴィアがボンピアーニから、架空のラテンアメリカの国を舞台にした小説 *La mascherata* (『仮面舞踏会』、1941年) を発表したとき、一度は出版されて作品が流通したものの、直後に押収されるという事例もあった⁽⁴⁶⁾。ファシズム政権下での検閲は、必ずしも「法制化」し定められた基準に沿って行われておらず、記

録も完全な形で残っているとは限らないため、各作家の各作品がどのような経緯で出版許可を得たかを把握するのは容易ではない。上述のムーラ事件のように、ムッソリーニの一存で「通達」が送付され、検閲が厳重化されることもあったことを考慮するならば、『主婦の誕生と死』がほとんど偶然的に検閲を通過したということも、可能性としては考え得るであろう⁽⁴⁷⁾。

さて、当局の出版許可は下りたものの、『主婦の誕生と死』が単行本としての日の目を見るまでには、終戦の 1945 年を待たねばならなかった。1944 年、連合軍のミラノの空襲でボンピアーニ社の印刷工場が焼け、印刷物が焼失してしまったのである。

変更の加えられた版が刷られ、配給されようとしていた矢先、爆撃が（ミラノの）印刷所と印刷済みの書籍の全部数を破壊しました。その後、多くの出来事がつぎつぎと起こり、それらは、もはや私が「主婦」の心配をするには、重大過ぎるものでした。6 年が経ってから、出版社の意向で、わたしは小説を再度取り上げ、手元に残っていた校正刷に手を入れ、最初の版の状態に戻そうと努めました。しかし、古い教えと新たな教えが混ざっているところはどこにもないと、誓っていうことはできません。あらゆる点を元通りにすることに、過度にこだわりたくなかったのです。そこから、いくつか不合理な箇所が生まれましたが、ひょっとするとそれが、この女性の肖像の元来の不合理なところと、宿命的に、かつうまい具合に、調和していないとも限りません⁽⁴⁸⁾。

ようやくファシズム体制による検閲から解放された戦後の出版とあって、マシーノは、はじめは手元に残っていたゲラ刷を元に最初のバージョン通りにしようとしたが、結局、それにこだわることはやめてしまったと打ち明けている。「昔のスタイルと今のスタイルが混ざっていても、それはそれでわたしの文体

だ」と納得しているようにも見受けられる。検閲に出版を差し止められるのを避けようとして出版社が行った修正も、体制から強いられた修正もひっくるめて、自らの唯一無二のスタイルがつくられたのだと、距離を置いて自身の作品を眺めていたのかもしれない。マシーノは、『主婦の誕生と死』のあとがきを、「この女性の肖像は、私自身にとっても、いまやとても遠いもの感じられ、ほとんど見分けがつかないほどなのです」⁽⁴⁹⁾と締めくくっている。

結び

『主婦の誕生と死』が生まれた背景には、マシーノの自伝的要素も強く、ファシズム体制を直接的に批判しようという政治的意図はなかったかもしれないが、主人公である「主婦」は、体制が奨励する「良妻賢母」の女性像とは、まったくもって対照的である。自身もそうした「模範的」な女性の人物像からは逸脱した存在であったマシーノの3作目の長篇が、体制との関係が年々悪化していたにもかかわらず、検閲後にいくつかの修正や削除をしたうえで、ともかくも出版が許可されたのには、作家の超現実的で夢を見ているような、独特の文体に助けられた面があったと考えられる。

一方、体制の検閲については、1934年のムーラ事件や人種法と前後して行われた「書籍の浄化」を経て、それがときに急激に中央集権型に体系化されていく流れを確認した。体制下の検閲は、表面上は「自由なイタリアの出版界」を標榜しながらも、実際には作家と出版業界に「自己検閲」せざるを得ない状況を強いていた。出版自体を禁止するのではなく、体制寄りの専門家による作品の辛辣な批評、言論の黙殺といった手法を用いたほか、禁書扱いにされて大きな経済的損失を被るのを恐れる出版社を通して、否応なく作家自身に「自粛」させるよう働きかけていた状況が明らかになった。

『主婦の誕生と死』は、書籍版の出版直前に空襲で焼失し、戦後になってようやく単行本の刊行が実現したが、ネオレアリズモが隆盛する時代には注目さ

れることなく、早々に忘れ去られてしまった。マシーノ自身、この作品について、家族に次のように書き送っている。「誰もが賞賛するけれど、誰ひとりとして話題にする勇気のない、呪われた本なのです。あまりにも新しく複雑で、話題にするのがひどく難しいのだそうです」⁵⁰⁾。1970年と1985年に、それぞれボンピアーニ、ラ・タルタルーガ社から「再提案」された際にも、世論から十分な理解を得られたとは言い難い。当時、おそらく自作が「フェミニズムの先駆的作品」であるとしてあまりに短絡的に、表層的にしかとらえられないことに堪えかねてであろう、作者自身が閉口してしまったそうである⁵¹⁾。その意味では、どうもタイミングに恵まれず、テキストの多層的な理解という点でも、一筋縄ではいかない「困難な」作品だということができるかもしれない。しかしながら、特定の場所に縛られない作品の雰囲気と、検閲と付き合っていくなかで完成されていったと考えられるマシーノ独特のスタイルが、かえって非常に現代的で、読む者を惹きつける。

1945年、ようやく出版が実現しようというとき、何層もの検閲を経て様変わりしていたはずの校正刷を、もはや体制に縛られることのない、完全に「自由な」最初の状態に戻すこともできたのに、作者本人がそれに固執しなかったという事実は示唆的である。検閲下の困難な時代に執筆されたものでありながら、作家がその苦労を独創的で魅力あふれる文体に結実させたことで、今日においてもこのうえなく「現代的」であり続ける本作は、ひとつの完成品としては、作者の「呪われた」⁵²⁾本であるとの所見に反して、むしろ幸運な作品であると言えるのではないだろうか。

注

- (1) Cfr. Re (2000: 202).
- (2) Cfr. デ・グラツィア著、豊下ほか訳 (1989: iii)。
- (3) Cfr. Re (2016: 171).
- (4) Cfr. Bonsaver (2007: 20). このように、県知事にはある程度強い検閲の権限が認め

- られていた。しかしながら、1927年には、ムッソリーニが県知事に「首相広報部を通して送られる私自身の事前許可なしには、新聞の発禁や押収に踏み切ってはならない」との通達を出していることから、統帥が自らの広報部を通して報道を統制しようとしていたことも窺える（cfr. Bonsaver 2007: 21）。
- (5) Cfr. Bonsaver (2007: 25).
 - (6) 大衆文化省の成立には、ナチス・ドイツにおける、ヨーゼフ・ゲッベルス率いる国民啓蒙・宣伝省の影響もあったと指摘される。1933年4月のヒトラーの政権掌握からわずか数ヶ月後の同年9月、国民啓蒙・宣伝省には、新聞社や出版社に対する検閲や出版制限・禁止の全面的な権限が認められた。当時イタリアの首相広報部長であったガエターノ・ポルヴェレリは、ナチスの宣伝システムに張り合う必要性を主張している。Cfr. Bonsaver (2007: 108).
 - (7) 1933年のドイツの国政選挙に合わせ、ムッソリーニはヒトラーの『我が闘争』の翻訳権を秘密裏に獲得していた。ムッソリーニは国からの助成金をちらつかせて、まずモンダドーリに出版の話を持ちかけるが、丁重に断られると、今度はボンピアーニに翻訳・出版を依頼した。ボンピアーニの方はこの申し出を進んで受け入れた（cfr. Bonsaver 2007: 131）。
 - (8) Cfr. Bonsaver (2007: 122).
 - (9) 委員会には、未来派の代表格 E. T. マリネッティも参加していた。第1回目の委員会会議では、アルベルト・モラヴィアの『無関心な人びと』（*Gli indifferenti*, 1929）も候補に挙がったという（cfr. Bonsaver 2007: 178）。
 - (10) Cfr. Bonsaver (2007: 183).
 - (11) ムッソリーニは1928年10月10日、すべての新聞社編集主幹に向けたスピーチにおいて、イタリアのジャーナリズムは世界一自由なものであると宣言した（cfr. Bonsaver 2007: 9）。
 - (12) Cfr. Re (2005: 66-67).
 - (13) 当初のタイトルは *Niòminkas amore negro*（「ニオミンカス 黒い恋人」）であった。
 - (14) この通達の後、1934年4月から1935年8月までに禁止された本は260冊にのぼった。これは、1934年1～3月までに禁止処分になった書籍が3冊だけだったことに鑑みると、かなりの数である。また、修正・カットの上出版された本は74冊であった（cfr. Bonsaver 2007: 104）。
 - (15) Cfr. Re (2005: 67).
 - (16) «La novella offende la dignità di razza» Cfr. Bonsaver (2007: 99).
 - (17) 同年に1位を獲得したのはアキッレ・カンパニーレの *Cantilena all'angolo della*

strada であった。

- (18) Cfr. Re (2005: 71); Re (2016: 171).
- (19) Cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria (2001: 73).
- (20) 女性には子どもをたくさん産み、「家庭の天使 *angelo del focolare*」になって家を守ることが、男性には夫であり、父親であり、兵士であることが求められた。Cfr. 高橋 (1997: 230-237)。
- (21) Cfr. Re (2005:71).
- (22) Cfr. *Ibidem*. 当時の女性の出版状況については、ボンセーヴァーの著書に次のようなエピソードが紹介されている。1940 年頃、マシーノがボッタイの雑誌 «Primato» に短編を寄せたものの、「雑誌の傾向に合わない」という理由で不掲載となった。しかしボンセーヴァーは、エルサ・モランテが *L'Isola di Arturo* (『アルトゥーロの島』、1957 年) のペーパーバック版の前書きに「«Primato» は決して女性作家の書いたものを載せなかった」と書いていることに触れ、体制が女性作家の活躍の場を制限していた可能性を指摘している。Cfr. Bonsaver (2007: 368)。
- (23) Cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria (2001: 45).
- (24) Cfr. Moravia e Elkann (1990: 73).
- (25) Cfr. Re (2016: 171).
- (26) Cfr. Gadda (1931).
- (27) 当時の物価や、庶民の苦しい食生活については、たとえば以下を参照されたい。ジャンフランコ・ヴェネ著、柴野均訳『ファシズム体制下のイタリア人の暮らし』白水社、1996 年、pp. 125-131。
- (28) 翻訳版の署名に Paolo Masino と男性を示唆する名が使われていることは興味深い (cfr. Re 2016: 173)。
- (29) Cfr. Zavattini (2002: 92-93).
- (30) Cfr. Zavattini (2002: 93).
- (31) *Le donne nel regime fascista* (『ファシズム体制下の女性たち』、2007 年) の著者 ヴィクトリア・デ・グラツィアも、ムッソリーニによる雑誌の廃刊の原因はボッカシーレの描く「支配的で、男性と同等に自由」な「グランディ・フィルム嬢」にあったと考えているようである (cfr. De Grazia (2007: 289-290))。しかしながら、「Le grandi firme」は廃刊後、実質的に «Il Milione» に引き継がれたかたちになり、編集部やイラストレーターらの顔ぶれも別段変わらなかったため、前者が「風紀を乱す」という理由で廃刊にされたのであれば、なぜ «Il Milione» も同じように検閲の標的にならなかったのか、依然として疑問は残る。

- 32) Cfr. Masino (2019: 17).
- 33) Cfr. *ibidem*.
- 34) Cfr. Masino (2019: 101).
- 35) Cfr. Gambaro (2019: 226).
- 36) 「主婦の秘密の声は、9 ページのノートだった。2 日に 1 つことばを書く程度だったが、幻覚にとらわれたような字で、決して前に書いたことを読み直すことも、続きを気にすることもなく書いた。[...] それらは自分の実生活には何の言及もないページだったが、「もうやめて」という、彼女なりの神への言伝だった。」Cfr. Masino (2019: 71).
- 37) Cfr. Masino (2019: 175).
- 38) Cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria (2001: 23).
- 39) 1938 年 12 月 3 日付 (cfr. Mascia Galateria 2020 :22).
- 40) Cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria (2001: 23).
- 41) Cfr. *ibidem*.
- 42) 1941 年 1 月 30 日付、両親に宛てた手紙 (cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria 2001: 36)。
- 43) Cfr. Mascia Galateria (2020 :36); Bonsaver (2007: 307).
- 44) Cfr. Masino (2019: 223).
- 45) 出版総局長ゲラルド・カジーニに送られたもの。Cfr. Re (2005: 73); Bonsaver (2007: 259).
- 46) 元々、ファシスト党 (PNF) から、『仮面舞踏会』に登場する独裁者がムッソリーニの風刺であるとの指摘があり、出版を禁止するよう圧力がかかっていたが、大衆文化省の検閲の結果、多少の修正指示を受けただけで出版が許可されたのであった。しかし、その後警察の情報提供者から、モラヴィアが書いたものはパロディであるとの摘発があり、それを受けて内務省が事実確認をした際には、大衆文化省は「『仮面舞踏会』の新たな出版はすでに禁止されています」との返答をしている。Cfr. Bonsaver (2007: 238-239).
- 47) 1943 年 7 月のムッソリーニの逮捕後、マシーノがサロ共和国の逮捕者リストに名を連ねるほど、あからさまにファシズム政権の中枢から敵視されていたことを考えると、出版がすんなり許可されたことは意外とも言える。ファシズム下の検閲が、ある種のグレーゾーンを含んでいたことはしばしば指摘されている通りであり、政権と作者・出版社との関係や、その時々政治的事情による「例外」的措置が取られることは珍しくなかった。これこそが、ときに当時の検閲が「ゆきあたりばったり」(cfr.

Re (2000: 202) のものであったとされる所以なのかもしれない。

(48) あとがきは 1945 年のもの。Cfr. Masino (2019: 223).

(49) Cfr. *Ibidem*.

(50) Cfr. 1946 年 4 月 18 日付の、両親に宛てた手紙。Cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria (2001: 79)

(51) Cfr. Zancan 2009.

(52) Cfr. Bernardini Napoletano e Mascia Galateria (2001: 79).

主要参考文献

【テキスト】

Paola Masino

Nascita e morte della massaia, a cura di E. Gambaro, Milano, Feltrinelli, 2019.

【引用参考文献】

AA.VV.

1993 *Italian Woman Writing*, edited by S. Wood, Manchester, Manchester University Press.

2000 *A History of Women's Writing in Italy*, edited by L. Panizza and S. Wood, New York, Cambridge University Press.

2001 *Paola Masino*, a cura di F. Bernardini Napoletano e M. M. Galateria, Milano, Fondazione Arnoldo e Alberto Mondadori.

2017 *Writing and Performing Female Identity in Italian Culture*, edited by V. Picchietti and L. Salsini, 2017.

Bonsaver G.

2007 *Censorship and Literature in Fascist Italy*, Toronto, University of Toronto Press.

De Grazia V.

1993 *Le donne nel regime fascista*, Venezia, Marsilio.

Elkann A./Moravia A.

1990 *Vita di Moravia*, Milano, Bompiani.

Filippini E.

1982 *La massaia nel baule*, in «la Repubblica», 17 giugno.

Gadda C. E.

1931 *Monte Ignoso*, in “Solaria”, VI, 7-8, luglio-agosto.

Galateria M. M.

2020 *Dalla scrivania tutta per sé al confino della Massaia* in AA.VV., *Venezia Novecento. Le voci di Paola Masino e Milena Milani*, a cura di A. Ceschin, I. Crotti, A. Trevisan, Venezia, Edizioni Ca' Foscari 2020.

Gambaro E.

2019 *Nota al testo* in Paola Masino, *Nascita e morte della massaia*, a cura di E. Gambaro, Milano, Feltrinelli, 2019.

Re L.

2000 *Futurism and Fascism, 1914-1945* in AA.VV., *A History of Women's Writing in Italy*, edited by L. Panizza and S. Wood, New York, Cambridge University Press.

2005 *Women and censorship in fascist Italy*, in AA.VV., *Culture, Censorship and the State in Twentieth-Century Italy*, edited by G. Bonsaver and R. S. C. Gordon, London, Legenda, 2005.

2016 *Polifonia e dialogismo nei romanzi di epoca fascista* in AA.VV. Paola Masino, a cura di B. Manetti, Fondazione Arnoldo e Alberto Mondadori, Milano, 2016.

Zancan M.

1998 *Il doppio itinerario della scrittura. La donna nella tradizione letteraria italiana*, Torino, Einaudi.

2009 *Il destino di essere donna*, in P. Masino, *Nascita e morte della massaia*, Milano, Isbn Edizioni, Edizione Kindle, 2013.

Zavattini C.

2002 *io. Un'autobiografia*, a cura di P. Nuzzi, Torino, Einaudi.

ヴェネ、ジャンフランコ

1996 『ファシズム体制下のイタリア人の暮らし』, 柴野均訳, 白水社.

エーコ、ウンベルト

2018 『永遠のファシズム』, 和田忠彦訳, 岩波書店.

北原敦 (編)

2008 『イタリア史』, 山川出版社.

高橋進

1997 『イタリア・ファシズム体制の思想と構造』, 法律文化社.

田之倉稔

2004 『ファシズムと文化』, 山川出版社.

デ・グラツィア、ヴィクトリア

- 1989 『柔らかいファシズム』, 豊下楯彦ほか訳, 有斐閣.
和田忠彦
- 2008 『ファシズム、そして』, 水声社.